

第 25 回：毛沢東主席の中国語

生来のナマケモノで、懶惰亭日乗の日々を送っているが、若いころ一度だけ必死に勉強した時期がある。1981 年、当時勤務していた銀行から派遣されて中国留学に出されたときのことである。これに比べれば高校をサボって映画館通いをしていた受験時代のほうがよほど楽だった。

実は留学前に半年間ほど東京の語学学校に通わせてもらい、そのおかげで中国語も初級レベルには達しているだろうと自負していたのだが、華国鋒総理が日本を公式訪問したとき、宮中晩餐会(だったと思う)のスピーチをニュースで聞いて、なさけないことに彼の中国語が一言一句も理解できなかった。その翌年は中国への留学が内定しており、当時社内で中国語ができる社員は一人もいなかった。そんな状況下で第一期生として上海に放り出され、留学を終えて帰国したら国際部に配属され、中国語の通訳や翻訳を伴う勤務に就かされることは目に見えている。通訳できなかったらクビだ！

81 年 7 月、上海空港に降りたときは悲壮な覚悟だった。項羽や韓信に笑われそうだが、自分としては破釜沈舟の覚悟で背水の陣を敷き、日本語の本や雑誌は全て日本に残し、中日・日中辞典も現地の辞書に切り替えた。上海華東師範大学では、規定により校内の宿舎で生活することになり、学生食堂の褐色のお米や、蟻が浮かんでいるスープにはすぐ慣れたが、掃除のおばさんや、門番のおじさんの言葉がほとんど理解できなくて、第二のショックを味わった。おまけに、その年は魯迅の生誕 100 年とかで、最初に学んだ作品が「薬」という短編で何度辞書を引いてもチンプンカンプン。正確に言えば語意は分かるのだが、何を指しているのかさっぱり理解できず、懊惱呻吟・七転八倒したものだ。後になって分かったのだが、魯迅は書きたいことが自由に書けなかった時代に、比喩や暗喩を多用して暗黒の時代を描いており、三国志と水滸伝しか読んだことのない筆者にエニグマ解読のような高度な作品が理解できるはずはなかったのである。

文豪魯迅先生のせいで三度目の落ち込みを経験したが、幸いなことに 80 年代の上海の学習環境は抜群であった。当時上海で働く日本人駐在員は 100 名程度、約 30 人の留学生仲間を除けば話し相手になってくれる日本人はいなかった。寂しいから東京に電話しようとしても、ヒチコックの映画に出てくるようなグルグル回す方式の電話で、回線も悪く何時通じるかわからない。街に出かけても日本料理屋はない。ゴルフ、カラオケ、バーなぞあるわけがない。買い物に出かけても、小さな窓口に何十人もの手が千手観音のように伸びてくるなかで、掴み取り競争に加わるには度胸と体力が必要だ。おまけに当時の商店の売り子の態度は凄まじかった。欲しいものを告げても返ってくる答えは大半が、怒鳴りつけるような「没有(メイヨー)＝ない！」。運よく買い物に成功しても、品物とおつりが投げ返されてくるのである。買う気はますます失せる。

最終ページに重要なお知らせ「注意事項」がありますので必ずお読みください。

1/3

学習の話に戻るが、上海で生活して初めて分かったのだが、中国は広い。北京語、上海語、広東語のような地方言語が各地にあり、それぞれが日本語と朝鮮語くらい異なる言語である。そのために北京語にやや似た「普通話」という全国共通の標準語が発明されたのだが、当時これに長けている中国人はほとんどいなかった。みなそれぞれ出身地の訛りを背負っており、純粋な標準語しか知らない外国人が理解するのは至難の技である。

1972年、日中国交回復のとき、中国側通訳として活躍した台湾出身で神戸育ちの林麗韞女史は初めて毛沢東主席の日本語通訳をしたとき、毛沢東の湖南訛りが聞き取れず、頭の中が真っ白になり、焦れば焦るほどパニックが広がり、横にいた早稲田大学OBの廖承志(中日友好協会会長)が、見るに見かねて通訳を代わってくれたという。

中国の現代史に登場する指導者のなかで標準語が喋れた人物は一人もいない。孫文は広東語、蒋介石は浙江語(寧波)、毛沢東は湖南語、華国鋒は山西語、鄧小平は四川語訛りを背負っていた。中国人は側近を身内で固めるというが、言語の壁も大きな理由である。中華人民共和国の建国に功のあった政治家・軍人のうち圧倒的多数が、湖南省・湖北省・四川省という揚子江の西部流域の出身者である。それぞれお国訛りはあるのだが、お互い何とか理解することができる。毛沢東・朱徳・鄧小平たち揚子江出身グループに加わった北京や長春などの北方出身者は言葉で相当苦労したはずであり、言語の壁がその後の人間関係に影響したケースも多かったことであろう。

幸いなことに、いまの時代は共通語が全国に普及し、言葉の壁は存在しない。ただ上海人だけはプライドが高く、いまでも上海語にこだわる。むかし中国の大手銀行が東京支店を開設したときのこと、10数名の中国派遣の行員のうち、支店長を含め約半数が上海出身者であった。内部の会議は当然標準語で行われるが、興奮すると支店長が先ず上海語を喋りだす。すると上海人がそれに付和雷同して上海語でまくしたて、いつの間にか上海語の会議となってしまったそう。

こんなことをするから上海人は全国から嫌われるのである。むかし朱鎔基(元総理)が上海市長だった頃、記者会見で上海人をどう見ると問われ「精明だが高名ではない(せこいが、聡明ではない)」と喝破し、全国から喝采を浴びたことがある。

来年の5月から上海万博が約半年に渡って開催され、中国の更なる成長の起爆剤になると期待されているが、上海人は中国から万博見物に来る地方出身者を田舎者などとバカにせず、暖かく迎えてほしいものである。(了)

平成 21 年 5 月 26 日

最終ページに重要なお知らせ「注意事項」がありますので必ずお読みください。

2/3



東洋証券株式会社 金融商品取引業者 関東財務局長(金商)第121号
日本証券業協会 加入
本社所在地 〒104-8678 東京都中央区八丁堀 4-7-1 TEL03-5117-1040

ご投資にあたっての注意事項

手数料等およびリスクについて

株式の手数料等およびリスクについて

- 国内株式の売買取引には、約定代金に対して最大 1.2075% (税込み) (約定代金が 260,869 円以下の場合、3,150 円 (税込み)) の手数料をいただきます。国内株式を募集、売出し等により取得いただく場合には、購入対価のみをお支払いいただきます。

国内株式は、株価の変動により、元本の損失が生じるおそれがあります。

- 外国株式等の売買取引には、売買金額(現地における約定代金に現地委託手数料と税金等を買いの場合には加え、売りの場合には差し引いた額)に対して最大 0.8400% (税込み) の国内取次ぎ手数料をいただきます。外国の金融商品市場等における現地手数料や税金等は、その時々々の市場状況、現地情勢等に応じて決定されますので、本書面上その金額等をあらかじめ記載することはできません。

外国株式は、株価の変動および為替相場の変動等により、元本の損失が生じるおそれがあります。

債券の手数料等およびリスクについて

- 非上場債券を募集・売出し等により取得いただく場合は、購入対価のみをお支払いいただきます。

債券は、金利水準の変動等により価格が上下し、元本の損失を生じるおそれがあります。外国債券は、金利水準の変動等により価格が上下するほか、カントリーリスク及び為替相場の変動等により元本の損失が生じるおそれがあります。また、倒産等、発行会社の財務状態の悪化により元本の損失を生じるおそれがあります。

投資信託の手数料等およびリスクについて

- 投資信託のお取引にあたっては、申込(一部の投資信託は換金)手数料をいただきます。投資信託の保有期間中に間接的に信託報酬をご負担いただきます。また、換金時に信託財産留保金を直接ご負担いただく場合があります。

投資信託は、個別の投資信託ごとに、ご負担いただく手数料等の費用やリスクの内容や性質が異なるため、本書面上その金額等をあらかじめ記載することはできません。

投資信託は、主に国内外の株式や公社債等の値動きのある証券を投資対象とするため、当該金融商品市場における取引価格の変動や為替の変動等により基準価格が変動し、元本の損失が生じるおそれがあります。

株価指数先物・株価指数オプション取引の手数料等およびリスクについて

- 株価指数先物取引には、約定代金に対し最大 0.0840% (税込み) の手数料をいただきます。また、所定の委託証拠金が必要となります。
- 株価指数オプション取引には、約定代金、または権利行使で発生する金額に対し最大 4.20% (税込み) (約定代金が 2,625 円に満たない場合は、2,625 円 (税込み)) の手数料をいただきます。また、所定の委託証拠金が必要となります。

株価指数先物・株価指数オプション取引は、対象とする株価指数の変動により、委託証拠金の額を上回る損失が生じるおそれがあります。

ご投資にあたっての留意点

取引や商品ごとに手数料等およびリスクが異なりますので、当該商品等の契約締結前交付書面、上場有価証券等書面、目論見書、等をよくお読みください。